豐澤團平の研究

一

人形淨るりにあつて、太夫、三味線、人形の三業が、均等の重要さを持つ各自の藝術であつて協力して、渾然たる「操」を構成してゐることに異論はない。併し太夫の女房役である三味線の「内助」の功は、實際においては、絶大なものである。この意味において人形淨るりにあつては三代鶴澤友次郎卽ち初代松屋清七、二代豐澤團平（清水町の師匠）の二人は、劃期的の三味線彈であり、作曲家であり、前者は淨るりに音譜記號（朱草）の創始、發明者であるが故に、後者は節章の復古者であると共に、集大成者であつたが故に、最も研究さるべき二大三味線彈である。然るに人形淨るりを語るものゝ多くが、僅かに近松門左衛門を語り、竹本義太夫を云爲して、人形淨るりの全般に及ぼしたとなしてゐる。これほど事理に通じない話はないと思ふ。

「近松」の淨るりは、三味線に合せて、太夫が語り、人形を動かして、始めて機能を全うしたものだ。活字本で机上で「近松」を讀んで「近松」を議論する。これで「近松」が解しえたりとするならば、庭先の松の木や笹の根元に鯉が捕れたり、鯛が漁られたり、蔦這ふ軒端に鯨がゐようといふのと同じだ。こんな無稽な事を言つてゐるのが、今の人形淨るり研究者である。

舞臺の實地について研究せよ。最も手取早い活字本での人形淨るりの研究から離れて、眼に人形、耳に淨るりと三味線とを豫想して淨るりの再吟味に取かゝれといふのが、判り切つた事で、行はれ難い研究の一途だ。

こんな志を擁いて、まづ手近かな、豐澤團平の研究からより〳〵に進んで行きたいと思つた。その結果誰でもが知つてゐる「壺坂」の淨るりが、今日の「壺坂」を成立するまでの過程と、豐澤團平が越路太夫卽ち攝津大掾と、明治十七年中八月二十三日に分離した一埒とを、玆に述べておきたい。

「壺坂」淨るりの原作は、今日まで世間には發表されてゐない事實であり、越路、團平の分離は今日まで、集合離散常ない藝人仲間の偶然の出來事として、明治淨るり史に注目されなかつた事件であるが、明治、大正、昭和の「淨るり」を變革する結果を見せた重大な、史實の因由をなしてゐるから、この二項目について、「團平研究」の一端を發表しておく。

二

「壺坂」の淨るりは、俗傳では三代大隅太夫が語り初め、團平の妻加古千賀の作であるといふが

これは誤りである。「壺坂」は「西國卅三所觀音靈場記」の一段で、正しくは「西國三十三所壺坂寺」の段が原作といへようが、この「壺坂」の一段は、人口に膾炙し、明治期の作として珍しく繰返へし〳〵語り傳へた異例の淨るりである。團平の妻女千賀には、「壺坂」よりも「大阪落城」とか「良辨杉」とか「宇治の茶摘三人娘」とかが、その獨力になる完作で、また等しく團平の符付だが、それらは人の口に上らないで、その作でもない「壺坂」が作者として傳へてゐるだけ、「壺坂」の淨るりが俗耳に入り易く出來てゐる。尤もこの淨るりが、後、明治二十四年七月五日稽古本として板行した時の著作者は加古千賀になつてゐるが、こは寧ろ豐澤團平節章の法律上の代表者として、加古千賀が署名してゐるといふだけである。

今日の正しき外題は「卅三所花の山壺坂靈驗記」澤市内の段となつてゐるから、「壺坂靈驗記」といふ院本があるかの如き形を取つてるが、さうでない。

「壺坂」淨るりの初演は、明治十六年未十月、大阪大江橋の席（セキ）といつた、今日の北區大江橋を北へ渡ると衝突り、右へ寄つた——昔の桝形の處にあつた席で、こゝで人形淨るりが興行された時に上演したのが始めで、初演者は豐竹島太夫（猫島と綽名された世話語りの太夫）で三味線は、豐澤新三郎ツレ同新之助で、共に初代新左衛門の弟子である。人形は吉田辰五郎一座。第二次に

語つたのが、名人竹本住太夫（雛太夫から越太夫となり住太夫を繼いだ人）これで中絶してゐたのを三代竹本大隅太夫が、住太夫の越太夫時代に傳承し、更に團平に聞かせて、改作曲したのが現今世上に行はるゝ「壺坂寺」である。故に團平の節付が前後二段に改訂され、その改訂淨るりが大隅太夫によつて世間に流布したといふ順序である。

この書卸しの明治十六年の大江橋席の番付を見ると「絲調里曉」と署名してある。「里曉」とは豐澤團平の作曲名である。

三

ところで、この原作が何人の手になつたか、今日の處では判明しない。恐らく大和壺坂寺で流布してる緣起に加筆した程度のものが、臺本であつたらうかと察せられる。

この原形の「觀音靈場記」が、各寺一段の形をとつた合作物で故宇田川文海翁なども、どこか一段書いたやうにも思ふが、少しも記憶がない。唯、「壺坂寺」を書かぬ事だけは確かだと、生前私に語られた事がある。この程度の合作だから何人の執筆か、今日の處分らないが、縱横に抹削された初演當時の豐澤新三郎使用の、最初の原本——豐澤團平自筆の節章入の一本を、委細に取

調べてみると、原本は何人の筆か分らぬが、訂正分が、團平及び千賀夫婦の自筆で交々書いてある。

然らば添刪の團平及び千賀自筆の章句は、團平の自作かといふと、恐らくこれは團平、千賀夫妻といふが寧ろ千賀の加筆が多分を占めてゐる事が筆癖によつて明瞭だ。

次に抹削された原作を、やう〳〵に拾ひ讀んで、これを基本として、左に錄しておかう。――これ好事の業でなく「文章」と絃にかゝる「章句」との相違が判るのと、作に對する豐澤團平の態度研究の一端ともならうの意である。

但し、現今行はるゝ「壺坂寺」と對比するといゝのだが、「壺坂」の版元は、「壺坂」の版權を法律的に所有するといふ理由の許に、藝人が、奉納の手拭に「壺坂」の文句を染めた事すら、抗告訴訟するといつたやうな話も聞く、訴へられようとしたのは藝人で、いつもおどかされ泣寢入だといふ事をも耳にしたから、この一文發表誌の版元の面倒を憶うて、現今の流布本は揚げぬ。――が、「　」、の間が抹削された原作で、『　』が團平夫妻の加筆と思はるゝ部分、その他は原作で、今に傳つてゐる部分と吻合してゐるが、それは現在のみでなく、最初の「壺坂」の原形である事を知つておいて頂きたい。（原本の假名遣ひなど、そのまゝにしておく。餘り讀みづらいとこ

ろは送り假名を付し、漢字を當はめて讀みよいを專一にした。）

四

西國三十三所

壺坂寺の段

（節付以前の原作及び第一回の原形）

「櫻花空も閑き春霞所の名さへ三芳野や　金峯山の片ほとり町家の棟も高取の城下に續く土佐の町澤市といふ按摩有生れ付たる正直者　夫婦の中も睦じく妻のおさとは」「營みに絲はり取て賃仕事つゝれさせてふ洗濯やのりかい物を打盤の音も幽の暮しなり「片襷勝手へ出て汲で來る心の端香ぞ愛らしく　サア澤市さん茶がわきました出端一つ呑しやんせとゆすり起せば目を覺しヲヽお里か火一つくれぬかい夜の短いのでとんと目がさめぬ」イヤコレお里わしやそなたに『ちと』尋たい事が有マア〳〵下に居や　ハテサテ『下にゐやいのう外の事でもないがいつぞは聞ふ〳〵と思ふて居たが『丁度幸ひ光陰矢の如しとやら』月日の立は早いもの『なア』わがみとおれとがコウ』一所に成てからモウ三年『稚い時より言なづけ』互ひに心を知て居る『に』『なぜそのやうに隱しやるぞ』隱さずに『さつぱりと打明けて』いふて「くれ」（『たも』）と「改つたる」（『どこや

ら濁る』）詞の端お里は更らに「晴やらず」（『がてん行かず不しんながらに』）コレ澤市さんそりやお前何をいはしやんす嫁入してから三歳の間「只の一度も」（『ほんに〳〵露程も』）隱し立したよふな「事はない」（『ことごとんせぬが』）夫れ共に『何んぞ又』お氣に入ぬ事有ばいふて聞して下さんせそれが夫婦じやないかい「の」（『な』）と「いへば澤市腹を立」ムウさふいへば（『いやれば』）こつちも云ふぞヲヽ何成と云はしやんせヲヲいはいでかコリヤお里よふ聞けよ私と夫婦に成て丸三年「そりや」毎晩七つから先寢所へ手をやつてもついに一度も居た事が有るかそりやもふおれは此やうな盲目（めくら）殊にゐらい疱瘡で見るかげもない顏形どうでわれの氣に入らぬは無理ならねど外に思ふ男が有ばさつぱりと打明て云てくれ「たら此樣に何の腹を立たうぞい」尤もわれとおれとは從弟どし專ら人の口端にもアノお里は美しい〳〵と聞く度々（『毎に』）「わしや」（『おれは』）やう諦めてゐる「故」（『ほどに』）惱氣は『決して』せぬ『ぞや』コレどうぞ明して云ふてたもと『さすが盲目の悲しさに何にも知らぬ心根を聞いてお里は涙ぐみ」（『立派に云へど目にもるゝ涙呑込む盲目の心の内ぞせつなけれ聞くにお里は身も世もあれずすがり付て』）エヽそりや胴慾な澤市さんいかに賤しいわたしでも主有お前をふり捨て外に男を持よふなそんな女と思ふてか「お前と女夫にならぬ先御家老筑後縫之助樣より私をくれと仰有つたを斷いふた私の心お前と女夫に成たい斗」（『ソ

リや聞えませぬ〳〵エヽ聞えませぬわいなア』）「エヽほんに〳〵」とゝ様やかゝ様に別れてから「は」おぢさんの「内へ引取られ」お世話になりお前と一所に育てられ三つ違ひの兄さんと云ふて慕「せし其」（『してゐる』）内に『情なやこなさんは』生れも付ぬ疱瘡で目界の見へぬ「其と成てわたしは顔に疱瘡の跡さへなくて仕もふたそは義理を思ふておぢ様が實のおまへを人に預け私を手づから御介抱其お情の有難さ子供心に成人して澤市さんと女夫に成手引共成杖共成大恩受けたおぢさまの萬分一の恩報じと思ふた念が屆いたか女夫に成た其日から」（『其上に貧苦迫れど何のその一たん殿御の澤市さんたとへ火の中水の底未來までも夫婦じやと思ふ斗コレ申』）お前の目を「ば」治さんと此壺坂の觀世音「昔の帝のお眼病平癒なさしめ給ひしと傳へ聞いたる其爲に」明けの七つに鐘を聞きそつと拔出で只一人山路いとはず三歳ごし「願ふてゐても」（『せつなる願ひに』）御利益のないとは「何の」（『いか成』）報ひぞや觀音様も聞へぬと今も今迚恨んでゐた私しの心もしらずして外に男が有るやうに今のお前の一言がわたしは腹が立わいのと口說き立たる貞節の涙の色ぞ誠なり「聞て澤市手持なく何の答へももぢ〳〵と春撫さすり手を合せ」（『始て聞し妻の誠今更何と澤市が詫の詞も涙聲』）アアコレ女房『ども』何も云ぬ勘忍して「くれい」（『たも謝つた〳〵〳〵わいの』）そふとは知らずかたわのくせに愚痴斗ロレこらへて「くれ」（『たも』）と『ばかりにて』「詫

び涙指で目ぶたを引ぱつてもくらきに迷ふ盲目の見る事ならぬ業病は何の因果と男泣イヤこれ女房我身の志死んでも忘れぬ忝いが」（『手を合したる詫び涙袖や袂を浸すらん』）『やう〳〵涙押拭ひあやまつた女房のお里も涙にくれながら顏を上げのふお前の疑ひはれたのも遍に佛の御慈悲ぞと喜ぶも又道理也澤市涙押拭ひ』夫程『に迄』信心して「くれ」（『たもつ』）てもおれが此目は『コレマア』『治りはせぬ『わいのふ』エヽそりやマア何を言はしやんす「やら」（『ぞいな』）「三歳が間觀音様へお願ひ申した一心で御利益有るはしれた事」（『此年月の憂艱難雨の夜雪の夜霜の夜もいとはぬ私しがはだしまゐりもみんなお前の爲じやぞへ』）『サアそれ程に迄祈誓をかけ願ふてたもつた志有難いとも嬉しいとも何んぼ知らぬと云ひながら其女房の『そなたをば此年月の廻り根性觀音様と云ふたとて罰こそあたれ何のマア此目に明いてたまる物かいのふ』『サアわれは三年してくれても肝心のおれは夢にも知らず何ぼうわれが願ふてくれても御利益の有う筈がない」エヽ何のいなアわしの體はコレイナアおまへの體も同じ「事」（『愚痴』）を云はふより「心にかけて願ふて下さんせと夫大事と女房の詞は實にもかくやらん澤市も頭を上げそうじやそんなら此上はわれと俱俱參て見ん氣の毒ながら連て往てたもと云へばお里も悅んでそんなら早ふと身拵へ痛はりながら手を引て壺坂さして出て行」（『ちやつと心を取直し觀音様へ共々にお願ひ申して下さんせ〳〵と

夫を思ふ貞心の心遣ひぞ哀れなり涙にくれながらヲヽ過分なぞや女房共そふそなたが一心のすはつた上は御佛の枯れたる木にも花咲くとやら見へぬ此目は枯れたる木アヽどふぞ花か咲したいなといふた處が罪の深い此身の上せめて未來をイヤサアノ女房共手を引いてたもいざ〳〵といふに嬉しく女房が身拵へさへそこ〳〵にいたはり渡す細杖の細き心も細からぬ誓ひはふかき壺坂のお寺をさしてたどり行』)

傳へ聞く壺坂の觀世音は人皇五十代桓武天皇奈良の都にまします時御眼病甚しく「よつて」此壺坂の觀世音へ時の方丈道喜上人一百七日の御祈禱にて忽ち平癒有らせられ今に至つて西國の六番の札所とは皆人々のしる所「げに有難き靈地なり」『折しも坂の下よりも「澤市夫婦辿り來て漸う汗を押拭ひ邊り見廻し女房が』(詠歌の節章)(『詠歌を道のしほりにて澤市が御寺間近く詣て來て』)コレ澤市さん信心は大事なれど『病は氣からといふからは』お前のやうに『コレしほ〳〵していやしやんすと猶『病氣が猶重ふ成る誰もゐぬのを幸ひに日比覺への歌成りと氣晴しのため諷ふて見やしやんせぬかと女房がすゝめに澤市打點頭き」(『病ひは重らふこんな時にはわつさりと日比覺への歌成りと諷はんしたらどふじやいのふ』)ムヽホンニそふじやの「われが」(『我が身の』)言『や

る』通りくよ〳〵思ふは目の毒じや『げな』『そんなら』アヽさらへと思ふてやつてのけふしかし誰も居やせぬかエヽ儘よ「人は居ても目にはわからぬこんな時は身の一德ハヽこれなア仇口利かずと諷はしやんせヲツと合點と杖持つて片手に拍子取々の諷ふ唱歌も身の上の暇乞とは神ならず歌のふしさへ跡や先心はくもるしめり聲」うきが情か情が憂か靈と消え行く我身の上はヲヽあぶないわいなあ「もそつとこちへエヽ我が身が引はつた斗りに恂りして肝が宿がへ跡は皆忘れて仕舞ふた」(『コレハしたり其樣に引ばりやんないのふ引はつた斗りに恂りして肝が宿がへかアヽしもふた跡は皆忘れた』)アハヽヽホヽヽと歌を暫しの道草に御本堂へと登り來てサア〳〵澤市さん「もう」來た『はいなハアもう玆が觀音樣かやヤレ〳〵有難や〳〵ハアヽはなむあみ陀佛〳〵コレコレこちの人今宵こそゆつくりと』『程に』御詠歌を『夜もすがら』上ませふ『では有るまいかと』『女夫が咄しの共處へ名うての惡者うはばみの三一人の男に呼き會ひお里の顏を打詠め小蔭へこそは忍び行く斯とは知らず夫婦づれ』『夫婦共』唱ふる詠歌の音」『聲』も澄みていとしん〳〵と「見へにける」殊勝なる岩を建て水を湛へて壺坂の庭のいさこも淨土成らん「詠歌をあげて澤市がコリヤ」『コレ』『お里「そちの詞に隨ふて」(『そなたの詞に從うて』)叶はぬ事と「は知りながら」(『思へ共』)來る事は來ても中々に此目が「治る事はない」(『治りそふな事はないわいのふ』)エヽ此人はいのふ

又しても〳〵そんな事「コレ此壺坂の觀音樣桓武天皇樣奈良の都にまします時眼病にて御惱それ故に此觀音樣へ御立願された時早速にお目が明いたげなそれ故お前に勸むるも天子樣じやといふたとてたとへ蟲けらのやふな我々でもあなたに隔てはないわいなあ兎角に信心といふものは氣を長ふ歩みを運んで心を鎭めて一心におすがり申せば何事も叶へてやろとのお慈悲じやわいのふそんな事いふ手間でさあ〳〵早ふお唱へ申しましよと」(『永々の眼病故急な事には行ぬ共兎角に氣を靜にもち信心さへすれば治る事は疑ひないと』)力を付れば「澤市も」『いかさまのふ』)ほんに「云ば」(『いやれば』)その通り『そんならコレ』わしは「けふ」(『今宵』)から「只一人」三日が間爰に斷食『する程にそなたは早う内へ往んで何かの用事しまふておじや』治るとも治らぬとも此三日が『間』運「の」定めきよふ云ふて下さんしたそんならわ『た』しも「是より」内へ歸り「倶に三日の斷食仕ませう日數が濟めば迎へに來るぞへそんなら日の暮れぬ内ちつ共早ふアイあいとはいへど女房は夫の心いかゞぞと心殘して立歸る跡見送りて澤市はこらへ〳〵し胸の内一度にわつと泣出し此年月の介抱を若い心で苦にもせず大事に懸る志嬉しいぞよ今別れるが一生の別れ嘸やとつかは迎ひに來て死んだと聞は歎くで有ろ夫斗りが氣にかゝり迷ひはせんかとくり返し」(『何かの用を片付てすぐに來ませふ程にコレかならず何處へも行かしやんすなヲヽどこへ行かふぞこれ

からこんやはアノ』觀音樣と首引じやアハヽヽホヽヽと笑ひながらに女房が跡に心は置霜の散りて果敢なく別れ共知らでとつかは急ぎ行』)

【註】この處、團平の節章は相當苦心を要したらしく三樣の文句に三樣の節付があつて、この一枚は殊に縱橫に細字の書入がある。讀難いのを丹念に拾うて「笑ひながら」以下の書いて消された他の二樣の文句をも次に錄しておかう。

『笑ひながら女房が跡に心を置露のちりてはかなき別れとは後にぞ思ひ知られけり』(第一稿)

『笑ひながら急ぎゆくそれぞ夫婦の別れとは後にぞ思知られける跡に澤市唯一人胸のやるせなく前後不覺に泣きさけぶ』(第二稿)

とあつて、この第二稿も島太夫の初演には抹殺されてゐるが、今日の「壺坂」に「跡に澤市唯一人……」が復活されてゐる。これらは相當注目に値すると思ふ。

『コレ過分なぞや女房共此年月の介抱其上貧苦に迫る此をれを』唯の一度もあいそ盡さずあまつさへ目界の見へぬこの俺を大事に掛てたもる志それ共知らず色々の疑い立コレ勘忍してたも今別れてはいつの世に又合ふ事の有べきか不便の者やいぢらしやと大地にどふと身を打ふし前後不覺に歎きしが漸々顏を上ア、もふ〳〵なげくまい〳〵三歲の間『女房が信心凝らして』願ふても何の

利益もないものにいつ迄生きても詮ない「命」此身『世の諺にも言通り退けば長者が二人のたとへわしが死ぬのがそなの爲生ながらへて何れへ成と『よき』縁付「しや」(『をしてたもヤレ』)人なき中にそふじや〳〵と立上り亂るゝ心取直し下る【註、現在の「壺坂」は「上る」也人形の舞臺裝置に注意あれ】段さへ四つ五つ『早明け六つの鐘の音いざ最後時急がんと杖を力に盲目のさぐり〳〵てよふ〳〵とこなたの岸に下り立ては』『六つを告來る暮の鐘杖一本が力草足元さへも定らず不動の水や六本杉岩に刻みし五百の羅漢弘法大師の御作と聞くも尊き此靈場せめてお寺の土となり未來は必成佛の導き給へと手を合せ」いと物凄き谷水の流れの音もとふ〳〵と響き「渡りし瀧川瀨紛ふ斗の深谷ゑい溪探り〳〵て澤市が杖と笠とを傍に置き南無阿彌陀佛と斗りにていふ聲俱に飛込だり跡へいきせき女房がアノ氣にかかる胸騷ぎ最前の歌と云ひ澤市さんの身の上が案じられ道から直に取て返し本堂をさがしても姿も見へずどふした事と氣は狂亂尋捜せど眞くらがり澤市樣いのふ〳〵とあちらへうろ〳〵こなたへ走り足にさはりし杖と笠見るより女房はつと斗『を心のあて瀧のそば杖をかたへにつき立て南無阿彌陀佛と諸ともにがばと飛込む身の果の哀れなりける次第也』)

五

豐澤團平自筆の節章付の原本は、節付がこゝで切れてゐる。卽ち前半だけが完成してゐる形である。按ふに節付が二冊の本によつてなされ、その前半の節付が、私が玆に寫した原本で後半は別にあるのであらうが、私は見ない。前揭の原文と、團平添刪の部分とを比較すると――、作の善惡は別として、人形の舞臺と、淨るりとして絃にかゝる語り物の特殊性がハツキリとするやうに思ふ。

もう一つ心づく事は、この淨るりの枕が今日行はるゝものと、この初演の時と推定さるゝものと文句が全く違つてゐる。團平は自作の新曲は勿論の事、每日芝居で勤むる「彈出し」の三味線は二度と同じ手を彈なかつたといはるゝ位に、日々太夫の語る文句に、――節に關係の薄い處は常に研究を重ね、三味線の手を變へてゐたと傳へらるゝ程の人であるから、この「壺坂」の枕はいよ〳〵といふ上演までには幾度ともなく變化、改廢が行はれたものと察する。この最初の節付と思はるゝ前揭の「櫻花空も閑き春霞」は或は、この本限りで、床には上らなかつたのかも知れない。現にこの節章本の表紙裏にも「枕」に相當するらしい「白絲の絕へし契りを人問はん」と

いふ書出しの一文があつて、節章はなくて無殘に抹殺されてゐる。恐らく今日の「壺坂」に見る「夢が浮世か憂世がゆめか」の枕は別に、彼の妻女の千賀が作したものを、團平自筆の作曲で、別に存してゐるものと推定する事が出來る。何故ならば團平の遺子加古平三郎氏の話に、「壺坂」を私の養母が作したといふのは世間の誤傳で、幼な心に覺えてゐるのは「夢が浮世かうき世が夢か」の一句だけが養母の作だと聞いてゐます。と語つてゐるが、この言葉は文字通りには解釋されないで「夢が浮世か」の一句だけといふのは、この「夢が浮世か」から初まつて「身代の薄き烟りの」までの枕が千賀女の作と解してよからうと思ふ。卽ち前揭の如く「營みに絲はり取つて賃仕事つゞれさせてふ洗濯や」といふ文句が旣に團平自筆で、この新三郎本に明記してあるに見て、この淨るりの枕だけが完全に千賀の作で別の紙切か何かに團平が作曲したのだらうと推定する。

元來團平といふ人は、夜半酒盃を銜んで、或は人と話しながらもいゝ節付が心に浮ぶと、懷ろ紙を取出して書付けておいた人だといふ、現にこの淨るりでお里が「三味線出してよい機嫌ぢやの」といふ澤市の唄ふ唱歌の作曲は、懷ろ紙の切端しに認めてあるのが、今遺族の手に殘つてゐる。拙著「人形芝居雜話」に寫眞して、この紙切の譜を揭げておいたから、就いて見られたい。

これと同じに恐らく千賀女自作のこの淨るりの枕と、山の段の後半の朱章とが、別に存するのであらうと思ふ。

六

山の段の後半の節付のない原本が、謄寫のまゝ團平の眼を通さずに、そのまゝ殘つてゐるから參考のために揭げておく。現今行はるゝ「壺坂」と比較すると、殘る原形に興味が深からうと思ふ——が、これは畢竟原作で、床にかゝる前の未定稿であつた事を、くれ〴〵も申添へておく——その原作次の如し。

合點行ずと思ひしに目の明かぬを悲しみてさては此谷間へ身を投さしやんしたかいなアエ、そりや餘り胴欲じやわいのふお前の病氣を治さふと朝夕祈りし甲斐ものふ死ると云ふは何事ぞ跡に殘つたわしが身は誰を便りにしませふと返らぬ事をくり返へし筐にありし杖と笠抱きしめ〳〵聲上げて歎く涙は谷に水の逆立ごとくなり折からうそ〳〵小蔭より以前の惡者二人連イヤコレ姉様最前からのよまい事何にも案じる事はない便りにする者たんと有アノやうなどふめくらを大事に

してもふ明かぬ死だものをいつ迄いふても役に立ぬわ男に持て何不足のないうわばみの三さんじやサア連て居て女房にすると手を取ればふり放しエヽそこどこではないわいのふこいつはしぶといどめらふじやなアわりやどふ有てもいやじやといふのかエヽそんな事は聞きともないとすきを見て逃出せばどつこいそふわと抱留れば一生懸命むしやぶり付首筋ねぢ付ケ踏倒し是程いふても耳にも入れぬ此女うぬも一所にどめくらと地獄の道を行きさらせと情を知らぬ悪者共お里の兩足引摑み谷間へどふと突放し跡を見ずして歸りける。山また山の谷底に澤市夫婦は氣絶して息も通はぬ其有様爰に不しぎやこくふに聲有り澤市々々と聲かけられて息吹返し何心なくふり返り見れば尊やコハいかに十二一ト重に緋の袴いとも氣高き女郎（上藹）の御姿にてあらはれ出觀音御妙の御聲にていかに澤市我は壺坂觀音なり汝の眼病平癒させ一命助け遣はすと宣ふ聲に打驚きコハ有難きと見返れば御姿消てなかりけり女房お里も息吹返へし見れば涙の此有様ヤアおまへは、わりや女房どふして爰へサイナア最前お前に別れ歸りしも蟲が知すか何とやら心にかゝりしそれ故に取て返へしてさがす中足にさわりし杖と笠殘つて有れば死なしやんしたに違ひはないと涙にくれて居る所へ悪者共に取まかれこの谷へ落されしも是もつきせぬ夫婦の緣と聞て恂りハア有がたや忝や一人ならず二人迄助けて下さる御情と悦び勇んで邊りを見れば霞色どる山々の木々の梢

も花盛りくまなく見ゆる其思ひ譬へがたなき風情なり是よりすぐにお禮の詠歌お里諸共打連れて御本堂へと參詣し納る杖は今の世の寶物とこそしられけりこれも遍に壺坂の觀世音の御利益とかかる例しも有難きいはれを爰に殘しける。

七

因にいふ。歌舞伎へ「壺坂」の移植されたのは今の片岡仁左衞門が早い方だが、その初演に見るとうはゞみの三に相當する人物が出てゐる。舞臺の「壺坂」で書いておきたい事があるが、他の機會にして今はそれに言及せぬ。明治期の作で、最も流行した淨るりだといふが、この原文の拙劣は言ふまでもない、千賀の加筆、團平の添刪が加つたといつても、文章としては稚拙、全く言ふに足らぬ駄作だ。有名な枕の文句でも、「つゞれさせてふ洗濯や」など語を成さない言葉だ。するとこの淨るりの價値は音曲としての「節付」一つにある。節の値打だ。——といふ事は、明治期に一人の淨るり作者がなかつた事を物語る。文樂座に對して彦六座に立籠つた團平が、古來淨るりの節の研究にその一生を捧げ、幾多の新作を殘してゐるが作品そのものが卑俗だ。團平ほどの名人が、こんな卑俗な作に節付したかと思ふと、團平その人の藝術觀にまで疑ひが起るが、

いつ、いかなる名人でも偉大な藝術家でも「時」の範疇の外には立てない。彼は新しい淨るりの創始者でなくて、古來の淨るり節の集大成者であつたのである。寧ろ彼の傾向は、淨るりの保存に力を盡してゐる。

團平が古來の淨るりを研究する態度は、まづ院本の節章（ゴマ）の尊重にある。丸本に殘るゴマを一點も諸忽にしない。ゴマからゴマまでの白字に節を考へ、三味線の手を付けた。かうして古名作に一々當ると名作であればあるほど、ゴマ一つさへもが動かせないと、彼は晩年に、その近親者に物語つてゐるのに據つても、節章尊重保存の團平の態度がハツキリと分る。

ところで、淨るりには既に知る如く、竹本座の西風と豐竹座の東風とがあつた。卽ち淨るりの風は異つてゐた。風の異なる結果、三味線のツボが異つてゐる。これは大切な淨るりの大問題だが、案外等閑に付せられてゐる。その理由は、三百年近い竹豐兩座の發達の跡は各自に相錯綜し混淆雜糅を極めて今日の風をなしてゐる。例へば西の竹本座で初演以來の作であるから「國姓爺」「寺子屋」は純然たる西風かといふに必ずしもさうでない。然らば東風も西風も、昔の事で、今日では意味のない事かといふに必ずしもさうでない。こゝが問題だ。

八

私に言はすれば、西風は竹本義太夫創始の義太夫節の所謂「當流」であつたが、實は純然たる西風は初代義太夫一人限りで亡んでゐるといへる。尤も西風の精神を繼いだ二代の義太夫即ち播磨少掾は、「當流」の大成者であつたが、播磨は、東風の豐竹越前少掾から多分の感化影響のあつた淨るりである事を、淨るり史は敎へてゐる。又は初代義太夫のワキを語つて終始した竹本賴母は、筑後よりは東風の若太夫に近い傾向を持つた太夫だつた。筑後の歿後は、政太夫の播磨と賴母とが當流を大成したのだ。だから少くとも「西風」に「東風」が浸潤した事は否定出來ない。

その上、例の寛延元年竹豐兩座の間に行はれた「忠臣藏騷動」と呼ばるゝ人形の初代文三郎と竹本座の紋下竹本此太夫との確執は、西風の太夫と東風の太夫とを全然交替せしめてゐる。この事實は、東西の兩風を既に、この時認められないとも解さるれば、また西東の混淆を明確に認めたとも解さるゝ。且つこの事以降の東西兩風の錯綜は否めない事だと言へる。

その結果は、淨るりの「風」の上から見た系統でいへば、――大ざつぱにいふと筑後の跡は、西風を基調とする二代政太夫系と、東風を基調とする大和掾と、西を去つて東へ飛んだ豐竹筑前との三傳統が後の淨るりを支配してゐる。

大和掾は卽ち初代文三郎に逐出された此太夫、後の筑前に替つて東の豐竹座から、西の竹本座へ來た「東風の太夫」豐竹三輪太夫の後身である。この政太夫系と大和掾系と筑前系とが、後の淨るり系統を構成したのだから、今日の文樂座の系統は、竹本座の系統を引けるが如く、自ら呼號もし、又世間でもさう思うてゐるやうだが、實際の歷史はさうは敎へないで、文樂座の「座歷」としては寬政度に發祥した人形淨るり席の發達して櫓を揚ぐるまでに至つたものであるが。「藝歷」としては、竹本長門太夫、春太夫系統が久しく連續して紋下に立つてゐたのだから、――豐竹三輪太夫の大和掾の系統だから、寧ろ「東風」の傳來を引いてゐると見ていゝ。

ところが、久しく文樂座を支配し、大阪淨るりの根幹をなしてゐたこの春太夫系統が、五代春太夫、攝津大掾、三代越路太夫でさしもの春太夫系といはうか、攝津系といふ方が、今日早判りのするこの傳來の「風」が、殆んど全く越路太夫で絕滅し、次に代つたのが綱太夫系統に屬する法善寺の竹本津太夫系統であつた。そして今の紋下の竹本津太夫、次の紋下を豫想さるゝ二代豐竹古靱太夫が、共に綱太夫系統であり、この綱太夫系は、言葉を換へると、染太夫系ともいへるもう一つ遡ると政太夫系なのである。卽ち政太夫、大和掾系の二流二つの淨るりの「風」の對立を、玆に見ると言ふのが私の言はうとする意味である。實に世の中は綯へる繩のやうで、儼然と

してこの二つの「風」が今日西東兩風の變化した風で對立してゐる。併し今日の現在の文樂座は唯一つの殘つた人形淨るり座であるから、各流各系を盡く網羅して吳越同舟でゐるが、その支配者からいふと前掲の如く系統立てゝいへるのである。そして京風の系統の「風」の孤壘を今文樂座に守つてゐるものは、三味線の紋下鶴澤友次郎だともいへる。

九

何故私は、豐澤團平研究の途上、淨るりの「風」に卽してかういふ事を述べるかといふと、團平はこの東も西もの「風」になづまなかつた人、古今の節を集大成しようとした名人だ。されば攝津大掾といふ明治期の名人を、豐澤團平が彈いてゐたのは、明治十年九月二十四日から同十七年七月までの約七年間であつたが、團平をして尙久しく攝津を彈いて、「攝津」をして大成せしめたならば、或は明治昭和期の淨るりは今日の「風」を成さずして異つた結果を見せてゐたらうと思ふ。卽ち團平に近松門左衞門を配しても、今日の淨るりの大勢にはさしたる影響はあるまいが攝津を彈く事長からしめば、今日の淨るりは、今見、聽くとは異つたものであつただらうといふのが、私の言ひたい處である。攝津大掾は、三代野澤吉兵衞に仕込まれた、天賦美音の名人だつ

た。それに「風」の異つた磨きをかけたのが團平が彈いてゐた時代だ。それが明治十七年申七月に團平は、文樂座を去つて新興の彦六座へ投じた。言葉を換へると攝津大掾の越路太夫を見捨てて先代大隅太夫を仕立上げようとした。併し攝津と大隅との天分に隔りがあつた。結果から見て可惜名人團平をして、最後の驥足を伸ばしめえなかつた事は、松屋清七が病身であつたよりも尙淨るり界の恨事と言はねばならぬ。

十

攝津と團平とを分離さした――後の淨るり界に影響の多い、この事實は何が原因であつたか？この問題は今日まで明治の人形淨るり史で、重大な問題に拘らず、何人も輕々に見てゐる。ところが、私は豐澤團平の遺族の手に保存された書類を、こゝ數年に亙つて調査の結果、團平の妻女千賀の手記せる。

明治十七年申八月二十三日

文樂芝居引一條書

といふ半紙横二つ折六枚の記錄によつて、その曲折の眞相を掴む事が出來た。

團平文樂座引退の要は、明治十七年に彦六座が稻荷境内に新築し文樂座へ當らうの興行策戰。文樂座は松島から御靈に移轉して、新興の彦六座を一揉みに揉みつぶさん氣配を見せた。この時團平を文樂座へ曾ては出座さす事に骨折つた素人義太夫の萬鳳といふ當時の勢力家が、今度は彦六座へ團平を掛持させようとした。この兩座對立の場合だから、文樂座は承知しない。いろ〳〵興行師間の駈引曲折の末、團平は兩方への義理から何れへも出演しないとなつた末が感情の行違ひから、團平はまづ文樂座を斷つた。――卽ち攝津を彈く事を斷つた。といふのが表面の曲折で、その實、内部には越路の妻女たかと團平の妻女千賀と、共に賢夫人といはれた女だけに、却つて兩妻の間に角つき合ひがあつた。この裏面の現はれが、この手記によると、かうある。

（團平より千賀代筆の手紙で越路へ出演斷つた後）――……長々と御くろふとの返事にて其夜暮過ぎ長尾太夫と豐吉兩人參り博勞町（越路の宅）へ參り候處今日ケ樣の書面參り大井に驚きどう云事からかわかり兼候いよ〳〵の事成れば今迄願ひ候事ゆへ……せめては師匠春太夫殿十三回忌迄引て下されたらとの口上何か氣を引に來た樣子内（妻千賀から團平を指していふ「内」）の樣子みれんでも有ならお高さんでもまた〳〵でて來るゝ云ぬ斗りの使と相見へ成共内夫結け

んもほろゝに申候越路太夫はなれたら困るなどとそんな事思はれどうぞ遣ふて下されとは口すから土おくてもいや〳〵と被申兩人をかへしやり……尙又是迄年末八ケ年の間九州地方行候節も博勞町、師匠に向ひ色々失禮の儀も數多有候折々千賀立腹仕候得共師匠（團平）被申候は何分外に太夫と云てもなし先此人覺はよろしきようにあり仲間中へかたを殘す事も覺へてくれる人なくてはならぬと被申たゞ何事も御先祖へ奉公ゆへ成丈何事も心にかけぬやうしんぼうせよと被申候ゆへ何事も向うまかせにして付合來り候事……云々。

とある。越路一家と團平一家との交際ぶりが、手にとるやうに讀める。淨るり界無雙の賢妻二人の太刀打だ。兩雄竝び立てない事必ずしも男の世界のみではない。

越路の方の賢妻たか女の言分にすれば、團平の三味線では越路の壽命が續かない〳〵と、年來蔭で言ひ〳〵したといひ、團平に言はすれば、越路が持つてる更らに違つた聲を生み出し引出させるのが淨るり道のためだといふのが、その主張であつた。――が、遂に文樂彦六兩座對立といふ表面の興行界の事件を契機に、兩賢妻の日頃互ひに鬱積した不滿が勃發して、團平と越路とは遂に分れて、二人を同じ床に再び見出す事がなかつた。この「事實」が、明治、昭和への淨るりの「風」を再び元へ歸へして、豐澤團平の淨るり集大成の大業をして中途に挫折せしめたのであ

る。その代償として團平には新作「大阪落城」「良辨杉」「猿蟹合戰」などの新作曲があるが、これらは團平をして重からしむるに足らない。健腕無比の名人團平の刹那の藝は殘したが、それは舞臺藝術であるが故に、後人は語り草としてのみ知るだけだ。功績の殘るべきは「淨るり集大成」の偉業だつたらうものに。惜しいかな、兩人の妻女は、共に餘りに賢こすぎた。

（昭七、一、八、夜半）